

『主をあがめた女性たち』

'22/12/18

聖書箇所: ルカの福音書 1 章 39-56 節 (新約 p.107)

皆さんは、かつて、神様に感謝したくて、したくて…、神様のことをほめたたえずにはいられなかった…、というような経験がないでしょうか？「神様、ありがとうございます！あなたは、何と、素晴らしい御方なのでしょう！感謝いたします！」…そんな風に、神様のことをあがめずにはいられなかった、というような経験です。正直言って、今、私たちが生かされている時代は、新型コロナの問題があったり、戦争や不景気の問題、それに、少子高齢化の問題など、様々な不安や困難に溢れた難しい時代であるかも知れません。

しかし、今日のみことばを見てみますと、溢れんばかりの感謝の中で、真の神様のことを、ほめたたえずにはいられなかった女性たちのことが載っています。それは、①イエス様の母＝マリヤと…、②バプテスマのヨハネの母＝エリサベツであります。彼女たちは、それぞれが、御使いガブリエルから告げられた通りに、お腹に赤ちゃんを宿している(＝妊娠している)ような状態でありました。

命題: エリサベツとマリヤは、なぜ神様のことをほめたたえたのでしょうか？

そんな状態で、マリヤとエリサベツたちは、一体、何を考え…、また、どのようなことを思って…、神である主をほめたたえたのでしょうか？今日は、そういったことを、皆さんと一緒に見ていきたいと思います。そうすることによって、願わくは、私たちも、彼女たちのように、心から湧き上がってくるような思いでもって、真の神様のことを感謝し…、また、賛美できるような者になっていきたいと思います。

I・エリサベツが、神様のお働きを **実感** できたから！(39-45 節)

まず、最初に見ていきたいのは、エリサベツの方です。一体なぜ、エリサベツは神様のことをほめたたえたのでしょうか？⇒それは、エリサベツが、神様の御働きというものを、激しく、“実感”できたから、であります。まずは、そういったことを確認していきたいと思います。どうぞ、今日の聖書箇所であります、ルカ 1:39-45 をご覧ください。そこには、このように記されてあります。

39 そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。

40 そしてザカリヤの家に行き、エリサベツにあいさつした。

41 エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。

42 そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。

43 私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。

44 ほんとうに、あなたのあいさつの声私の耳に入ったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。

45 主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」

●この当時、エリサベツが置かれていた 環境

今読んだみことばには、あのイエス・キリストの母親となる乙女マリヤの所に、ガブリエルという御使いが来て、「もうすぐ、あなたは男の子を生みます。名前をイエスと付けなさい！」ということ伝えて、すぐ後の出来事が記されてあります。この少し前の、36 節をご覧くださいと、御使いガブリエルが、マリヤに対して、こういったことを伝えてあります、『ご覧ください。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。』って…。

マリヤは、自分の親戚のエリサベツもまた、自分と同じく…、神様の特別な御導きによって、男の子を身ごもっていると聞いて、急いで、そのエリサベツに会いに行きました。実は、この時、マリヤが住んでいたガ

リラヤの町ナザレから、エリサベツが居た、『ユダの町』(39 節: ルカ 1:23 を参照)までは、直線距離にして、約 100km の距離がありました。しかも、この時、マリヤは、自分が聖霊によって妊娠しているということを聞かされたばかりで、ある意味、「妊娠初期」であったわけです。…にも関わらず、この時のマリヤは、エリサベツと、その夫ザカリヤに会うために、わざわざ、100km もの旅をしたわけです。もちろん、この時代には、電車やバスなどが無い時代でありました。

そのマリヤの挨拶を聞いた時…、何と、お腹の中に居るはずのバプテスマのヨハネが、エリサベツのお腹の中で踊り出して、エリサベツが聖霊なる神様によって満たされた！というのが、ここ 41 節の教えです。そして、42 節以降に、そのエリサベツが主をほめたたえた、その賛美の内容が書かれています。

●エリサベツが、主をほめたたえた 理由

このエリサベツの賛美を見てみますと、どうして、この時、彼女が、神様のことをほめたたえたのかが分かります。⇒その理由を簡単に説明すると、この時、エリサベツが、神様の御働きというものを、まざまざと実感していたから、と言い得るのではないのでしょうか？…と言いますのも、この時、エリサベツは、御使いが自分の夫ザカリヤに告げた男の子を妊娠していました。36 節をご覧くださいと、御使いが、エリサベツのことを、『あの年になって…』という風に言っていることから、恐らく、この時のエリサベツは、少なくとも、40 代…、ひょっとしたら、50 歳を超えていたのかも知れません。

そこに、今度は、親戚のマリヤがやってきます。しかも、そのマリヤは、「男を知らない処女」であるにも関わらず、聖霊によって、救い主を身ごもったと言うのです。…ということは、このマリヤは、自分の『主』となる方の母親…、つまり、救い主の母親が、自分のところに来てくれたということになるわけで、そのことをエリサベツは喜んでいました。しかも、この時、エリサベツだけでなく…、そのお腹にいたヨハネまでもが、『喜んでおどりました…』とみことばは教えるわけです。

この時のエリサベツにしてみれば…、どうやって、自分の妊娠を、マリヤが知ったのか、ということに驚いたのではないのでしょうか？⇒もちろん、私たちは、みことばを通して、御使いガブリエルが、そのことをマリヤに教えてくれた、ということを知っています。だから、マリヤは、エリサベツの妊娠を確認するためと言うか、一緒に、そのことを喜ぶために、エリサベツのところへ、『急いだ』(39 節)わけです。

どうぞ、もう少し、このことを説明させていただきます。この少し前の、24 節をご覧くださいと、『その後、妻エリサベツはみごもり、五か月の間引きこもって…』とありますように、エリサベツは、御使いが夫ザカリヤの前に現われてから、約半年の間、引きこもっておりました。…と言うことは、エリサベツの妊娠を誰が知っていたのでしょうか？確かに、夫ザカリヤは、自分の口がきけなくなった時点で、そのことを信じたでしょう…。しかし、そんなことを、夫のザカリヤ以外に、誰がすんなりと信じてくれるでしょうか？

恐らくは、そういったこともあって、エリサベツは、半年の間、自宅に引きこもっていたのではないのでしょうか？…この当時、50 歳を超えるような、エリサベツの妊娠なんていうものは、実際に、彼女のお腹が大きくならないと、誰もが信じられなかったでしょう…。つまり、この時点で、エリサベツの妊娠のことを知っている者は、ほとんど居なかったと考えられます(エリサベツが、ごく近い者にだけ話した可能性はあるが…)。実に、そんな時に、マリヤがやって来たわけです！恐らくは、そのことに、一番驚かされたのは、エリサベツ自身だったのではないのでしょうか？だって、エリサベツの妊娠を、そこから 100km も離れた所に住んでいた、マリヤが知っているはずがないじゃないですか…。そうでしょ！

ひょっとしたら、当のエリサベツ本人でさえ、最初は、自分が妊娠しているなんて信じられなかったかも知れません…。実際、エリサベツの夫ザカリヤは、最初、御使いのお告げを信じるのができなかったわけですから…。だから、彼女は、45 節で、『主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いな

¹ 恐らく、現エリサベツの事。旧約の、『ベテ・ハケレム』(エレミヤ 6:1; ネヘミヤ 3:14)だと考えられている。

ことでしよう。』と言って、マリヤのことを祝福(あるいは、称賛?)するわけです。

つまり、この時、エリサベツは、自分の妊娠を確信し、御使いが夫ザカリヤのところだけでなく…、マリヤのところにも現われて…、しかも、そのマリヤは処女であるにも関わらず、聖霊によって、救い主を身ごもっているという…、一連の神様の御業が、今、まさに、自分の身の周りに起こっている！ということを実感していたのです！皆さんもご存知のように…、この出来事は、人類の歴史を「紀元前と紀元後」とに分ける、ある意味、人類史上、最大のイベントです。実は、聖書を見ると…、最大のイベントは、イエス様の十字架であり…、イエス様の復活であるはずですけれども…、でも、世間一般的には、そのイエス様の誕生の方に、より大きな関心があったのかも知れません。まあ、いずれにせよ、エリサベツは、今まさに、神様が様々な御働きをなしてくださっている…。そして、自分が今、その真っ只中に居る！ということを実感していたのです。だから、この時、エリサベツは、聖霊にも満たされて…、『**大声をあげて…**』(42 節)、主をほめたたたえたわけですね。

●神様が特別な思いで導いてくださっている 現代

皆さん…。確かに、この時、エリサベツやマリヤは、救い主の誕生という、歴史上において、特別な時代に置かれていました。しかし、神様が特別な御計らいをもって導いてくださっているのは、何も、エリサベツやマリヤだけではありません。神様は、いつの時代であっても、特別な愛と恵みをもって、私たちのことを顧みて、今の時代をも導いてくださっているのです。だから、**Ⅱペテロ3:8-9**では、こう教えられています。『**8 しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。9 主は、ある人たちがおそいと思っ**』(ルカ 15:10) ⇒ 神は、たった1人の魂を…、あるいは、たった1人の罪人の救いを、愛おしく思っ

たから、神は、裁きの日を、1日1日、忍耐して…、遅らせてくださっています。それは、少しでも多くの方が救われることを…、天の神様が願っておられるからです！聖書を見てみると、救いというのは、すべて、神の御業であるということが分かります(Ⅰコリント 12:3)。…と言うことは、今に至るまで、神が救いの実を結んでくださっているということ…、それはつまり、神様が、今の時代をも変わらずに愛して…、憐れんでくださっている！という証しなのです！…だから、ある時にイエス様は、幾つかの例えを使って、神の愛を説いてくださいました。そこで、イエス様は、こう教えてくださったのです、『**あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。**』(ルカ 15:10) ⇒ 神は、たった1人の魂を…、あるいは、たった1人の罪人の救いを、愛おしく思っ

たから、私たちは、1人1人が、神様の前に、真摯な態度で向き合っていかなければならないのです！…と言うのは、神様が、私たちのことを愛し…、私たちが悔い改めて、神様の元に帰って来るのを、今日も待っていてくださっているからです！それだけではありません。神様は今、私たちの中にあっても、救われる魂を起してくださっています！実は、それって、スゴイ奇蹟なのです！神様の奇蹟や働きは、2000年前の、あの時代だけではありません！…今の時代に生かされている私たちも、また、神様の恵み…、神様の素晴らしい御働きの中に、今、あるのです！問題は、私たちが、そういうことを正しく理解できるかどうか…、正しい、霊的な目で、様々なものを見ることができているかどうかということに、実は、かかっているのです…。

Ⅱ・主が、自分のことを用いてくださったから！(46-48 節)

次に、イエス様の母親となったマリヤが、主をほめたたたえた理由を、できるだけ簡単に、3つ続けて見ていきたいと思います。まず、1つ目ですが、それは、神である主が、自分のことを“用いて”くださったから、でありました…。そのことが記されてある、ルカ 1:46-48 までをお読みいたします。

46 マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、

47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。

48 主はこの卑しいはしのために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思わせよう。

●当時、マリヤが置かれていた 状況

先程の、エリサベツの言葉を受けて、今度はマリヤが真唯一の神様のことをほめたたたえます。今読みださなければ、マリヤが言っていることは、ある意味、すごくシンプル(≒簡潔)です。マリヤは、自分のような卑しい存在に目を留めてくださった神様に感謝し…、それ故に、神様のことをほめたたたえる、と言うのです。しかし、ここで言われている内容がシンプル(≒分かりやすいもの)であるからと言って、そのことが簡単なことかと言うと、決してそうではありません。この時のマリヤには、大変な決心 & 覚悟が必要だったのです。

それは、**どういふことかと言いますと…、この時のマリヤは、婚約期間中であつたからです。婚約期間中**で…、まだ、正式な結婚には至っていないタイミングであつたのです！そんなタイミングで、子どもを身ごもると言うことは、今で言うと、シングルマザーと言うか…、「できちゃった婚」と言うような状態です。この時代…、特に、ユダヤ人たちの中であつて…、結婚前の女性が妊娠するということは、如何なる理由があつても、絶対に許されないことでした。それは、もう大変なことだったのです！結婚した夫婦関係以外で性的な関係を持った者…、つまり、姦淫を働いたとされる者は、「石打ちの刑」が下されるかも知れませんでした。そのように、レビ記 18 章や申命記 22 章などで教えられています。比較的、軽い罰でも、婚約を破棄された上…、見せしめにされるような…、そんな状況に、この時のマリヤは居たのです！

どうか、皆さん、想像して下さいますか？…マリヤは、「自分が聖霊によって救い主を身ごもっている」ということを、どのタイミングで、婚約者のヨセフに話したのでしょうか？⇒今でも、ナザレの町に行くと、マリヤが受胎告知を受けた場所に建てられたという教会(受胎告知教会)と、ヨセフの家の跡地に建てられたとされる(聖ヨセフ教会)とが、すぐ隣にあります。いえ…、もしも、彼らの(生)家が、すぐ隣でなかったとしても、ナザレが、小さな町であつたことは間違いありません…。マリヤは、100km もの旅をして、エリサベツに会いに行つて、そこで3ヶ月を過ごすわけですが…、その前に、ヨセフに伝えなかつたのでしょうか？

正直、聖書を見ても…、マリヤが、どのタイミングで、妊娠のことを、婚約者であつたヨセフに伝えたのかということは分かりません。しかし、皆さん、どうか、**マタイ 1:18-25**をご覧ください。『**18 イエス・キリストの誕生は次のようであつた。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になつたことがわかつた。19 夫のヨセフは正しい人であつて、彼女をさらし者にはしたくなかつたので、内密に去らせようと思つた。20 彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言つた。「ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。21 マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救つてくださる方です。」22 このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであつた。23 「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)24 ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、25 そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、**』

その子どもの名をイエスとつけた。』⇒このみことばが、はっきりと教えてくれていることは、当初、ヨセフは、マリヤの妊娠を、聖霊によるものであるとは信じていけなかったのです。だから、ヨセフは最初、マリヤのことを内密に去らせてあげようとしていたのです。…でも、この時、ヨセフは、一体どうして、婚約者マリヤの妊娠を知ったのでしょうか？

恐らくは、この少し前に、マリヤから聞いたのではないかと思います。…と言いますのは、マリヤが、御使いから、自分の妊娠を告げられて、そのことを、すぐ近くに住んでいた、いなずけのヨセフに言わなかったというのも考えにくいですし…、マリヤ以外の誰かがヨセフに伝えたというのも、正直、考えにくいからです。…しかし、その後、御使いが、ヨセフの夢の中に現われて…、そこで、ようやく、ヨセフは、いなずけマリヤの妊娠が聖霊によるものであると信じることになるわけです。

どうぞ、もう1度、今日の聖書箇所に戻っていただきますと…、マリヤがエリサベツを訪問した、恐らくは、その前に、マリヤは、自分の妊娠を、いなずけヨセフに伝えた後だったと、個人的には思います。しかし…、いずれにしても、マリヤは、正式な結婚前に、妊娠をしたということで、これから自分に襲いかかってくるであろう、試練の数々を予想していたはずなのです。ひょっとしたら、自分の結婚は破談になってしまうかも知れない…。しかも、子どもを抱えて…です。しかも、最悪の場合、見せしめにされて…、何らかの罰を与えられるかも知れない…。そんな状況に、マリヤは居たのです！

●自分が生かされている理由を、よく理解していたマリヤ

しかし、この時のマリヤは、そういったことをすべて分かった上で、こう賛美するのです。『わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたえます。』(46-47 節)って…。一体、何故、マリヤは、主をあがめ…、神をほめたたえたのでしょうか？⇒その理由を、マリヤは、こう言います、『主はこの卑しいはしたために目を留めてくださったからです。』(48 節)って…。

マリヤは、よく分かっておりました、私たち人間が存在している理由を…。例えば、詩篇 100:3 では、このように教えられています。『知れ、主こそ神。主が、私たちを造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。』って…。聖書が教える神様とは、私たち人間すべてを造られた御方です。だから、私たち人間は、1人残らず、その神様のもの…、神の所有物なのです！だから、その直前の、詩篇 100:2 では、『喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。』と教えるのです！私たち人間は、主に仕え…、主の前に集まるべき存在なのです！

しかし、実際は、どうでしょう？…多くの人たちは、真の造り主である神様に仕えるのではなく、自分自身の欲や損得に仕え…、あるいは、自分自身の感情に振り回されてしまっています。そういったようなことは、私たちが生かして、今も、溢れんばかりの恵みでもって満たして下さっている、神様のことを“無視”してしまっているとは言えないでしょうか！

しかし、マリヤは、そうではありませんでした…。マリヤは、自分が仕えるべき主なる御方が誰であるかをよく知っていたのです。だから、この当時の民たちは皆、神様のことを、『主』、つまり、ご主人様と呼んだのです。これは、以前にも学んだことですが、マリヤは、自分のことを、『卑しいはしたため…』(48 節)と呼んでいます。ここで言われている、『はしため』(δοῦλη)という言葉は、「女の奴隷」という意味です。それは、つまり、自分が主なる神様に対しては、従う！という選択しか無く、「ノー」とは言えない存在であることを、マリヤはよく分かっていたのです！…もしも、この中の誰かが、この時のマリヤのように、処女でありながら、聖霊によって身ごもったとしたら、マリヤのように、「よくぞ、こんな私に目を留めてくださいました」なんて言い得るでしょうか！

なのに、マリヤは、48 節で、『…ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしかせ者と思うでしょう。…』と言って…、自分が、これから、主なる神様に従っていくことで、それが、どんな困難を伴おうとも…、主に用いられることを喜んだのです。…果たして、私たちも、同じようなことが言い得るでしょうか？

Ⅲ・必ず、主が「最善」をなして下さるから！(49-53 節)

3番目のポイントに移りましょう…。マリヤが、主をほめたたえた2つ目の理由…、それは、主が、必ず、「最善」をなして下さる、ということ、マリヤが強く確信していたからです。続く、ルカ 1:49-53 をお読みいただきます。そこには、こう記されてあります。

- 49 力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、
- 50 そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。
- 51 主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、
- 52 権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、
- 53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。

①主を、恐れかしこむ 者を、主はあわれんでくださる。

ここで、マリヤは、3種類の人間たちについて話してくれています。①1つは、『主を恐れかしこむ者』で…、②2つ目は、『高ぶっている者…、権力ある者』…、③そして、最後3つ目は、『低い者…、飢えた者』です。

その昔、イエス様が、天の神様は、『…悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも(恵みの)雨を降らせてくださる…』(マタイ 5:45)と教えてくださったように…、真の神様は、基本、どのような者に対しても憐れみ深く、たくさんの恵みを与えて下さっています。しかし、ここで、マリヤが言うのは…、その中でも特に、神は、御自身を恐れかしこむ者に対して、より一層の憐れみや恵みを施して下さる、と言うのです。だから、私たちは、そういった意味におきましても、真の神様の前にへりくだり…、すべてに対して、謙虚にならなければならないのです。

②主は、おごり高ぶっている 者を懲らしめられる。

その次に言われているのは、高ぶっている者たちに対する神の扱いです。神は、主を恐れかしこもうとはせず…、その逆に、おごり高ぶっている者たちに対しては、懲らしめを与えられます。しかし、私たちも覚えなないといけないのは…、実は、懲らしめというのは、愛の行為であり…、懲らしめによって、その者が正しい道に立ち返るために行なわれるものである、ということです。

聖書が教えてくれているのは、私たち人間は、私たちの造り主であられ…、また、生かし主でもあられる神様の存在を無視してしまっている！ということです…。実に、それこそが、私たち人間の罪の根本なのです！それ故に、私たちは、正しい…、歩んでいくべき道からそれてしまっ…、問題ばかりで、出口の見えない道に迷い込んでしまった、ということです(ローマ 1 章など)。

しかし、神は、いつまでも、私たちの罪を見過ごされたままではおられません…。いつか、必ず、罪は裁かれなければなりません！そのことを…、神が、1日1日忍耐して、延ばして下さっている、ということ、先程のⅡペテロ 3 章のみことばは教えてくれました。…しかし、間違いなく、みことばが教えてくれているのは、必ず、その裁きはやって来るということです！決して、罪が裁かれずに…、見逃されることはありません！だから、私たちは、生かされている…、今の内に、罪を悔い改めて、救いを受けておかなければならないのです！

③主は、弱い 者を助けてくださる。

また、マリヤは、神様の助けというものが…、特に、身分の低い者や飢えた者に対して、より多く与えられるであろうということを教えます。確かに、これも、聖書のみことば全体が教えてくれていることであります。

例えば、詩篇 146:7 でも、こう書かれています。神様とは、『しいたげられる者のためにさばきを行い、飢えた者にパンを与える方。【主】は捕らわれ人を解放される。』って…。そういった教えは、聖書全体の中から、何ヶ所も見付けることができます。そのように、真の神様は、弱者たちに対して…、あるいは、助けが必要な者たちに対して…、よりたくさん、恵みの手を差し伸べてくださるのです。

真の神様とは、そのように、助けを求める者を助けてくださり…、1度道から外れてしまった者でも、もう1度、正しい義の道へ回復させてくださるような御方です。そのような神様が、私たちに救いを備えてくださったというのは、至極当然なことであると言って良いと思います。そのように、神様とは、最善なるみこころ…、完全な御計画というものを持っておられるのです。次のポイントで、そのことをもう少し深く見ていきたいと思ひます。

IV・主が、**救い**を備えてくださったから！（54-56 節）

最後、4番目のポイントは、主が、私たちのために、“救い”を備えてくださったというものです。そのために、マリヤは、この神様のことをほめたたえずにはいらなかったのです。どうぞ、今度は、ルカ 1:54-56 をご覧ください。そこには、こう記されています。

54 主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもべイスラエルをお助けになりました。

55 私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」

56 マリヤは三か月ほどエリサベツと暮らして、家に帰った。

● 神に、そむいた **イスラエル**であつても…

何度も言いますが、真の神様という御方は、憐れみに富んだ御方であられます。だから、神様は、イスラエルのことを忘れることなく、救いの手を差し伸べてくださったのです。申命記 11:26-28 を見てみますと、神は、当時のイスラエルに、こんな警告を与えられました。『26 見よ。私は、きょう、あなたがたの前に、祝福とのろいを置く。27 もし、私が、きょう、あなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令に聞き従うなら、祝福を、28 もし、あなたがたの神、主の命令に聞き従わず、私が、きょう、あなたがたに命じる道から離れ、あなたがたの知らなかつたほかの神々に従って行くな、のろいを与える。』⇒皆さん、分かってくださいますよね？天の神様は、イスラエルの前に、「祝福と呪い」とを置かれたのです。それらの内、どちらを手にするのは、イスラエルの歩み次第です。しかし、実際のイスラエルの歩みは、決して、ほめられたものではなく、過ちに次ぐ過ち…、反抗に次ぐ反抗で、何度も、偶像礼拝の罪を犯してしまいました…。それ故に、彼らは、自分たちの国を失うという悲惨な結果を、自らに招いてしまったのです…(参照:エゼキエル 12:14-15; 20 章; 22 章)。

しかし、神様は、そんなイスラエルであつても見捨てることをせず、救いの手を差し伸べてくださいました。その証拠に、今も、イスラエルという国が残っているじゃないですか！イスラエルの国は、紀元 70 年に、エルサレムが陥落してから、1948 年 5 月 14 日に再建されるまで、約 1,900 年に渡って祖国を失い…、至るところで、厳しく凄惨な迫害を受け続けてきました。しかし、それでも、なお、ユダヤ人たちが滅びることなく…、今現在も存在し続けているのは、ただ、神様が彼らのことを憐れんでくださって、そのイスラエルを守ってくださったからに他なりません(参照:アモス 9:14)。

● 2000 年経つても、**主**が忘れる **ことはない**！

そのように、神様は、1度選ばれたイスラエルの民たちを、今に至るまで導き続け…、今もまた、顧みてくださっています。マリヤは、そのことを、「神様が、その昔に、イスラエルの先祖であるアブラハムに話してくだ

された通りである…」という言葉でもって、この賛美を終わります。確かに、マリヤの賛美した通りでした…。

確かに、神は、あのアブラハムに対して、こう約束してくださいました。**創世記 12:3、『あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。』**って…。皆さん、聞いてくださいました？神が祝福してくださるのは、アブラハムとその子孫たちに留まりません。アブラハムの信仰にならうすべての者を、神は祝福してくださるのです！…実に、天の神様は、そういったことのために、この時、救い主であるイエス様を、この地上へ遣わしてくださったのです。

<励ましの言葉>

そのイエス様の、あの十字架は、私や皆さんの罪を赦すためでありました。イエス様は、私や皆さんの罪を、その身に背負って…、私たちの身代わりとなって、罪ある者として裁かれました。それによって、私たちの罪が清算されたのです。そうして…、イエス様は、罪と罪の報いである死に対して勝利して、約束通り、3日目に、よみがえってくださいました。それによって、イエス様は、ご自分こそが、真実であられ…、真の神であられる！という証しをなしてくださったのです。

つまり…、私たちが、エリサベツやマリヤのように、心から、神をほめたたえるようになるためには、まず、私たちが、この真唯一の神様を信じることから始まっていきます。今日、私たちが学んだように、彼女たちは、何でも、自分たちの思い通りに、ことが運んだから…、あるいは、何の問題も無くなったから…、だから、嬉しくて、神様をほめたたえたのではありませんでした！特に、マリヤは、婚約中の身でありながら、処女のまま、救い主を身ごもるといふ、人類の歴史上、誰も経験したことがないような…、未知の問題の中におりました。実際、この後、マリヤは、神様の律法に逆らつて、不貞を働いた者として、イバラの道を歩いていわけです。

今日はもう時間の関係もあつて、詳しくは説明できませんが、イエス様がお生まれになった時、『**宿屋には彼らがいる場所がなかつたからである**』(ルカ 2:7)と記されていますが、恐らくは、その時、ベツレヘムの町が混雑していたのではなく…、当時、マリヤとヨセフとが不貞を働いたと勘違いされて、村八分にされていたと思われます。もちろん、実際のマリヤは、神様の前に何の罪を犯したわけではありませんでした。しかし、世間から、マリヤは、そう勘違いされていたのです。

私たちが、今日のマリヤやエリサベツのように…、人類を代表するような、特別な御業に用いられることはないかも知れません。しかし、私たちも、マリヤやエリサベツと同じような恵みに預かることはできます…。彼女たちは、神様の完全さに信頼し、神様の御考えこそが最善であると確信していました。だから、彼女たちは、すべてを神様にお委ねして、様々な問題や大変な困難の中にあつても、感謝と平安の内を歩むことができたのです！そういったようなことは、現代に生きる私たちでも、同じような恵みの中にあつて、マリヤたちと同様の歩みをしていくことができるのではないのでしょうか？

イエス様は、サタンに誘惑された時、『**人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。**』(マタイ 4:4)とおっしゃられました。そのように、私たち人間は、神様との交わり無くしては、本当の喜びや満足というものを味わうことができません。神様は、私たち人間を、そのように造ってくださったのです！

今日、ぜひ、皆さんにお勧めしたいのは…、どうか、今の状態で満足してしまうのではなく…、もっと、この神様との交わりを持っていくことによって、私たちが如何なる状況にあつても、神様に対する信頼や感謝というものを失うことがないようにまで、成長させられていくことです。そうすることによって、神様が栄光をお受けになるだけじゃなく…、私たちもまた、主の前に、喜びを失うことなく歩み続けていくことができます。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。